

無線優位時代に **ケーブルWiFi** で 地域サービス革新へ ～無線を基盤にAR (拡張現実) や 音声認識でコンシェルジュを実現～

前号でケーブルWiFiのローミングを中心に紹介したが、今回は100Mbpsの光回線並みの3.9G携帯「LTE」の登場で始まる、無線優位時代の有線と無線の大競争のなかで、ケーブルWiFiがもたらす事業革新＝イノベーションのポイントを紹介する。

米国ではケーブルWiFiが 困り込みの切り札に

まず解約防止である。米国では、ケーブルビジョン、コムキャスト、タイムワリーナーなど巨大MSOが、加入者に無償でWiFiの接続サービスを提供している。通信キャリアとの競争が激しく、加入者が解約して通信側に移るのを防止するのが最大の理由だ。

米国MSOはケーブルWiFiで連携を強化し、FONと同じ方法で3G (LTEを含む) 携帯の完全なバイパスを形成し、顧客を完全に囲い込む戦略を展開している。

FONは、自宅の無線LANを会員が相互に利用し合っており、インターネットアクセス

を世界中で共有するシステム。ケーブルWiFiも、顧客の宅内WiFiルーターを公衆WiFiのアクセスポイント(基地局として友達同士で使うと、3G携帯に頼らずにインターネット通信ができるわけだ。

日本では3G通信キャリアにケーブルWiFiが取り込まれる状況も散見されるが、米国同様、宅内WiFiルーターを活用して宅内型アクセスポイントを増やすFON型に対するケーブル事業者の生き残り策となりそうだ。

ケーブルの解約は、無線との競争で増大する形勢である。

スマホやタブレット端末の爆発的な普及とともに、LTEサービスが、2015年の全国普及を目標に始まった。LTEでスマホを外付けモデムのように使ってPCでインターネット通信を行なうテザリングサービスが開始され、「固定回線は要らない」という加入者がNTTの光サービス

無線優位時代の有線 ルーターがケーブルWiFi

ケーブル事業者が、無線優位時代に生き延びる有力手段の一つがケーブルWiFiだ。WiFiは、スマホ、タブレット端末、次世代STB、PCなどの各種端末に内蔵されて普及し、高速化している。WiFiの最新の国際標準規格であるIEEE802.11n規格は理論値で最大600Mbps、次世代規格では11nの3倍の11ac、60GHz帯でギガビット通信の11adの標準化が日程に上がっている。ただし、無免許制で電波が込むと不安定化することを理解した上で利用する必要がある。

ケーブル事業者は、ケーブルネットワークにWiFiのアクセスポイントを簡単に取り付けられる強みを生かし、地域の生活情報を利用者がメリットを感じる形で提供していくことによって、サービスを劇的に革新できる。

以下にいくつか例を示す。

かざして情報が映像に ポップアップするAR技術 まず「拡張現実」といわれ

るAR (Augmented Reality) 技術。直接知覚できる現実世界の対象の映像にコンピュータが情報を付け加えたり、提示したりする技術である。iPhoneやアンドロイド端末上で動作するセカイカメラが一例だ。この技術を使えば、スマホで町並みを撮ると、交差点に「ここは昔事故があった」などの情報が「飛び出す絵本」のようにポップアップしてくる。

これは、タネ明かしをすれば、街中の風景の画像データをWiFiでセンターに送り、データベースとやり取りをしてデータをカメラの画面に映し出す仕掛けである。

これからの情報人手は、検索して情報を取るのではなく、スマホをかざして、対象にあるものをじかに感じ取る形に変わる時代になる。

日本ケーブルラボの豊川博仁主任研究員は「ケーブルは、そういう技術を地域サービスとしてやらなければならない時代に入ったと思う。もうすでにスマホをかざせば、すべて情報を取り出せる時代が来ているからだ」と指摘する。

業界では岡山県の矢掛放送

がAR技術を使ったWiFiサービスを近く開始する予定だ。

もう一つが、別掲のハートネットワークの例である。

ケーブルWiFi基盤整備 イノベーションの前提

ケーブルWiFiは、地域情報、AR技術、音声認識、巻紙型ディスプレイ、無線接続の自動設定がキーワードだ。

音声認識は、知りたい対象物にスマホをかざすと、スマホがしゃべってくれる。

巻紙型ディスプレイは、WiFiのアダプターが付き、新聞のようにディスプレイを広げると、パッと映像が出てくる。数年後に発売という。

また今の無線ネットワークは接続が複雑で、端末のネットワーク接続の自動化がケーブルWiFi普及に不可欠だ。技術的にはアプリを作った認証の仕組みを作るだけ。顧客サービスとして提供することは必須である。

ユーザーが地域情報を取りやすくするための無線環境整備が、これからのケーブル業界の競争力の一つになる。

言い換えると、WiFi網整備が無線優位時代のケーブルサービスのイノベーション実現の基盤である。その上でケーブル局はスマホがしゃべったり、教えてくれたりする「コンシェルジュ」サービスを大々的に展開する形になる。

ケーブルWiFiは、スマホ時代のケーブル事業発展の大きなきっかけである。

一方、ラボの野田 勉主任研究員は「地域密着は地方に学べというが、四国、中国、九州など地方の皆さんが新しい取り組みをしている。ただあまり連携してやっている例は見かけない」と指摘する。

前号で豊川氏が指摘したが、ケーブルWiFiの半径100キロメートルの連携が今後の課題。それを実現していく過程で、ケーブル事業者間で従来点していた先端技術のノウハウを幅広く共有し、地域サービスを大胆に革新していくことが、必然的に求められる。これが、業界全体のイノベーションを引き起こし、無線優位といわれる時代にケーブル事業を一大発展させる新たなエンジンとなるのである。

スマホのアイコンで地域情報をワンタッチ表示 ハートネットワーク「しゃべるアバター」を導入

ハートネットワークは、自主放送チャンネルの画面の左端に「新居浜市地域情報」「病院の情報」「イベント情報」「防犯情報」「火災情報」などのアイコンをデータ放送のオーバーレイ技術を使って常時表示している。

スマホにも同じアイコンが並ぶ。たとえば「火災情報」のアイコンを指で触れると、「今日の1時に火災がありました」と文字と音声で情報が流れる。データ放送と同じ内容のホームページを格納するハートネットワークのサーバーにアクセスしてスマホに表示しているわけだ。

テレビの大画面で2～3行の地域情報だけ流れるのは物足りないと感じさせるが、スマホの小画面とシンプルな情報表現は親和性が高く、アイコンに触れるだけで見られる便利さが、上々の評判という。

アイコンの並べ方は、スマホ画面上で縦と横に自在に変えられる。

ハートネットワークの尾関信圭事業推進室長は「ゴミ情報は、市役所のホームページに載っているが、検索が複雑。これなら必要なときにアイコンをピッと押せばすぐに情報が取れるのが、大きい」と話す。自治体での採用も検討されている。

また自治体の情報発信ツールとして新たに検討されているのが、しゃべるアバター。スマホ画面で話す女性がヒトかと思いきや、実はCGで作ったアバター。ウインクまでしてくれるチャーミングなキャラクターに加え、流れるような自然な音声でニュースを読み上げてくれる。

パワーポイントでニュースの「絵」を作り、ノートにテキストを入れておくと、音声合成機能で読み上げる仕組みで、まさに音声合成技術の高い水準を思い知らされるツールだ。

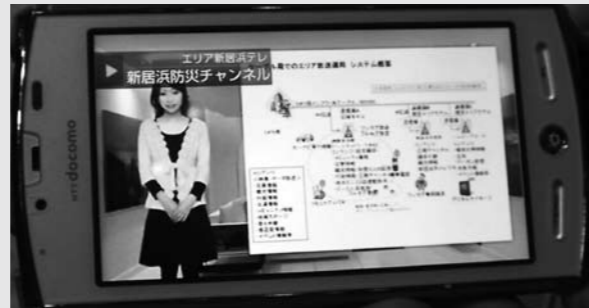
この技術は、キャストもカメラも不要。ケーブル業界でも大活躍が見込まれる優れものである。(32ページに関連記事)



▲新居浜市地域情報のアイコン



▲「火災情報」のアイコンをタッチすると情報が



▲しゃべっている女性は、アバターの「美女」